

## ヤスミン・アフマド——国民を(脱)構築する語り

井口由布

2011年12月11日の日曜日、東京外国語大学においてJAMS結成20周年記念企画として、シンポジウム「ヤスミン・アフマドにみる映画とマレーシア——グローバル的混成社会における大衆文化」が開催された。ここでは、二部構成からなるシンポジウムのうち第二部「ヤスミン・アフマドとは何だったのか」にかんする報告を行いたい。

日本マレーシア学会(JAMS)第20回研究大会の「個別研究・シンポジウム要旨集」によれば、第二部では「複層的なマレーシア映画業界にあって、各層の特徴を取り入れながら作品を作り上げ、六つの作品を遺して世を去ったヤスミン監督とは何だったのか」をとらえることがめざされた。映画専門大学院大学の深尾淳一氏が趣旨説明において、ヤスミン・アフマドを映画史や映像論などの映画にかかわる研究と地域研究との両面からみることを強調したように、第二部では映画研究と地域研究を代表するパネリストの報告がなされた。東京国際映画祭「アジアの風」部門プログラミング・ディレクターでもある日本映画大学の石坂健治氏(「ゼロ年代の世界映画とヤスミン・アフマド」と、京都大学の山本博之氏(「ヤスミン・アフマドを生んだマレーシア」)である。

石坂氏によれば、映画はナショナリズムと親和性をもって発展してきた。そのことは戦争の時代におけるプロパガンダ映画においても、戦

後の国際映画祭においても同様である。国際映画は世界の平和というスローガンがよく使われるが、それさえも異文化を知ることと国家の危機管理を関連づけた一種の国家の安全保障であるという。しかしながら、以上のような国家統合装置としての映画という20世紀的な見方は、21世紀において変質しつつあるのではないかと石坂氏はみている。21世紀において、映画はその話のなかで国家を解体していく傾向があるというのである。ロシアからきたユダヤ人娼婦を描くイスラエルのアモス・ギタイ監督の作品をはじめとして、カンヌ映画祭に出品される映画のなかでも移民や難民をあつかったものが多くなっている。ヤスミン監督の作品もこのような国家を解体する21世紀的な映画なのではないかと石坂氏は指摘した。また、乗り入れ状況が多くなり、国民国家の名前を冠した〇〇映画が成立しない状況がおきているという。

石坂氏は、2000年以降のマレーシア映画において新潮流が世界的に注目されたのは、9.11以降の状況にあって「いろいろな人がいても共生しているという普遍的なテーマ」の重要性であると見ている。石坂氏によれば、映画界における「新しい波」は、戦後イタリアのネオ・リアリスモやフランスのヌーベル・バーグ、1980年代香港ノワールなど、さまざまな時代にさまざまな場所で起きてきた。「新しい波」は社会状況とテクノロジーの変化において起きており、

「主流がつまらなくなっている」という感覚にもとづく、先行世代への「ノン」の表明であるという。その意味では、9.11 によってもたらされた世界的な状況にたいする「ノン」こそが、マレーシアにおける新潮流の原動力であったということかもしれない。つまり、石坂氏は 21 世紀の最初におきた危機が、国民国家の限界を超越した新たな普遍の模索をめざすきっかけになっているとみているようである。

ヤスミン監督の映画を国民国家の解体という方向に位置づけようとした石坂氏にたいして、山本氏は、ヤスミン映画がマレーシアにおける新しい国民の語りを形成しているとみているようである。山本氏によれば、マレーシアにおけるこれまでの国民像は二段階になっている。第一段階として国家公認の民族であるマレー人、華人、インド人と非公認のそのほかの民族が区分される。そのうえで第二段階として公認民族のなかでもマレー人に特権が与えられているというものである。しかしながら、独立から 50 年ぐらいの時期において、この「民族別二段階社会」が問題をもたらしており、最近マレーシアは新しい国民国家像である「一つのマレーシア(One Malaysia)」を提示しようとしている。それは、どの民族もマレーシアに参加できるが、マレー人の特権は継続させるというものである、という。

山本氏によれば、ヤスミン監督の作品はマレーシアにおける国民像をめぐる変化を背景にして登場しているという。それは端的にはヤスミ

ンの描く家族像に表れている。祖母が海南島出身の中華系であるようなムスリムといった登場人物などは、均質であると考えられる各民族の混血性を思い起こさせるという。山本は、ヤスミン作品を「自らの混血性に目覚めることを呼びかけた」映画であると考えている。つまり、それぞれの公認民族が均質な統一体なのではなく、むしろ境界線を横断した雑種的なありかたをしていることを問いかけようとする映画なのだということだろう。それでは山本氏のいう混血性は、新しい国民の語りを形成するだけで依然として国民国家の枠組みのなかに留まっているのであろうか。この点について議論が深まったわけではないが、山本氏も、マレーシア新潮流の映画製作者たちがさまざまな国で活躍し混成アジア映画を作っている状況などに言及していた。そこから見ると、混血性という概念は、公認民族のあいだの境界を横断して新しい国民の語りを創出すると同時に、国民国家の境界線をも横断する語りを創出する可能性をもっているのかもしれない。とはいえ、この点にかんしてはヤスミン作品をテキストとして分析するという作業が必要となってくるだろう。

今回の両報告は、文学でいうなら作家論、文化研究でいうならコンテキストを重視するものであったと思われる。今後の「マレーシア」映画のよりいっそうの発展にともない、作品論ないしはテキスト分析に着目した映画批評などが登場することに期待したい。